

明治・大正期の岩手県周辺における大型哺乳類の狩猟

— オオカミ・シカ・イノシシ・サル獺の地域性 —

岡 恵介¹

Hunting activity of large mammals in and around Iwate Prefecture during the Meiji and Taisyo periods

— Regional usage of hunting for Japanese Wolf, Sika Deer, Japanese Wild Boar and Japanese Macaque —

OKA Keisuke

1. はじめに

筆者はこれまで二十数年にわたって、北上山地の岩泉町を中心とする山村で、狩猟活動を含む山村の人々の環境利用について、調査を続けてきた。そのなかで明らかになったことのひとつは、北上山地の中北部山村では、明治初期には現存のツキノワグマやニホンカモシカの他にも、ニホンオオカミ（以下オオカミとする）、ニホンイノシシ（以下イノシシとする）、ホンシュウジカ（以下シカとする）、ニホンザル（以下サルとする）の4種の大型哺乳類が生息していたということである。しかしそれらは、明治から大正にかけての時期に、オオカミまたはイノシシがもっとも早く、その後シカ、サルの順で、次々と姿を消していったと伝えられている²。

ほかにも、たとえば岩手県の三陸海岸中部に位置する船越半島周辺には、かつてはオオカミがおり、イノシシが明治24、5年ごろ、シカが明治38年ごろ絶滅し、サルも大正中期ごろにはめっきり減り、いなくなっていた³。

遠野では、オオカミが明治20年代に姿を消し、イノシシも明治20年代に大量に病死し、シカは奥山に大正年間までいた⁴。サルは現在も目撃情報がある。

遠野市にもほど近い五葉山周辺域では、シカは明治末から昭和20年ごろまでは減少し絶滅の危機を迎えていたが、戦後回復に向かい、1970年代以降は急激な個体数増加を続けて分布域を広げ、農作物への被害が大きな問題となっている。オオカミは明治20年頃、イノシシは明治中期から末期に絶滅したが、サルの群れは現在も生息してい

1 東北文化学園大学総合政策学部教授 e-mail : koka@pm.tbgu.ac.jp

2 オオカミが先に姿を消したという伝承と、イノシシの方が早かったとする2説がある。シカはいったん絶滅したが、数年前から再び姿を見せ、増加しつつある。

3 遠藤公男「帰らぬオオワシ」偕成社（1975）

4 吉田政吉「新遠野物語 - 伝承と歴史 -」国書刊行会（1972）

る⁵。

青森県下北半島では、イノシシの絶滅が1880年代（明治14年～23年）、オオカミの絶滅が1890年代（明治24年～33年）、シカは1910年代（明治43年～大正8年）の絶滅といわれている⁶。そしてサルは、北限のサルとして今日まで命脈を保っている。

北上山地では、オオカミ、イノシシ、シカは、若干前後しながらも明治から大正にかけて、絶滅・減少していったようにみられる。下北半島でもほぼ同時期に絶滅がおきた。

それではその絶滅・減少の要因は何だったのか。いつ、どのような人によって、どのような方法で、なぜ滅ぼされたのか。逆に絶滅しなかった地域はなぜ残りえたのか。人の狩猟活動や獲物の交易、流通、狩猟の成果を利用する側の嗜好や利用方法の変化は、そこにどのように関わっているのか。本稿では、これまでの文献と現地での調査にもとづいて、明治・大正期の大型哺乳類への狩猟活動の実態とその影響による絶滅・増減について、これまでに知りえたことを述べていく。

なお、明治9（1876）年から18（1885）年までに岩手全県で編纂された『岩手県管轄地誌』（岩手県立図書館所蔵）⁷の物産の項に、哺乳類について記載のある村がある。今回、この一部を種ごとに図化して資料として用いた。

残念ながら物産としての記述であるため、その村に生息していたかどうか記されているわけではない。物産に記述がない村でも生息し、狩猟の対象となっていた可能性はあるし、記述者が郡ごとに異なるため、その取舍選択により狩猟獣に関する記述に濃淡があるのもやむをえない。ただ記述のある村では、実際にその大型哺乳類が生息し、狩猟の対象となり、猟果があったであろうことは推測できる。

さらに、この明治18年までの時期は、山村ではまだ主として火縄銃が猟に使用されていた時代である。つまり火縄銃時代の狩猟の実態を、ある程度映し出す資料として意味のあるものだと考えられる。

2. 明治以降の岩手におけるオオカミの記録

オオカミが本州から絶滅した時期は明らかではないが、最後の捕獲は有名な明治38（1905）年の奈良県東吉野村鷺家口における若いオスであったといわれている。また最近では、明治43（1910）年における福井城址での捕獲個体もニホンオオカミであったとする説もある。現在に至るまで生存説は絶えないが、検証にたる証拠はなく、とりあえず、明治期にニホンオオカミはほぼ姿を消したとするのが妥当なところであろう。

そのなかで岩手県は、オオカミが比較的多く生息していた地域だったと考えられる。たとえば、現在日本にはニホンオオカミの標本は3体しかないが、そのうちのひとつ、

⁵ 東海新報社「五葉山」五葉山刊行委員会

⁶ 平田貞雄「青森県の動物たち」東奥日報社（1985）、シカはエゾシカの可能性を含む。

⁷ 岩手県「岩手県管轄地誌（復刻）」東洋書院（2003）

東京大学農学部に保管されている標本は、明治14(1881)年に岩手県の業者から購入したものとされている。南部藩のお抱え絵師であった川口月嶺⁸(1811～1871)の墨彩作品にも、耳が小さく口が大きく裂け、足が太いという当時のオオカミを描く際の約束事を踏まえながらも、かなり写実的と思われるオオカミを描いたものがある(写真1)。



写真1 川口月嶺「狼の図」

オオカミの捕獲への賞金制度は、明治8(1875)年8月にはじまった⁹。賞金額については、牡7円、牝8円といわれているが、異説もある。以後、明治9年にも、畜産奨励のための狼退治の布達が出された。

明治9(1876)年における岩手への明治天皇の行幸の際には、多くの岩手の産物が天覧に供された。このなかに大型哺乳類では、オオカミとサルの皮が出品されている。また、生きたオオカミの仔も出品された¹⁰。

岩手県二戸郡浄法寺町では、明治12年ころにはオオカミが多くて、集団で牛馬を襲い困

⁸ 字は有度、円山四条派の鈴木南嶺に学ぶ。

⁹ 岩手県「岩手県農業史」(1979)

¹⁰ 「盛岡市奉迎録」盛岡市役所(1928)は、このオオカミの仔について「明治の初年頃までは野猪、狼は山野を徘徊し居りて野猪は田畑を荒し狼は人畜を害せり特に冬期に至れば狼は年々近郊に来り人畜之が為に脅嚇せらるること少からず。嶋県令之を憂ひ賞を懸け撲滅を謀る狼の子は一頭金参圓牝は金5圓牝は金7圓妊めるものは金9圓と各等級あり(賞金の金額に異説あり)村人または獵人之に應じ或は之を畏にし或は之を銃殺し僅か数年にして其の害を除くことを得たり、狼の子は先年親狼を殺して得たるものなり。」と述べている。

っていた¹¹。

明治19（1886）年3月には、獲狼賞与規則が牝5円、牡4円、仔1円に改定されたという記録がある。金額は下げられたが、制度が存続されたということは、この時点でオオカミの被害が心配なくなったという認識はなかったということであろう。ちなみに明治19年ごろの米1俵の価格は約2円であり、賞金の魅力はまだ充分あったと思われる。

このように、明治中期の岩手にはまだオオカミが生息しており、また信仰の対象でもあった。盛岡市川目地区にある山の神神社では、明治19（1886）年にオオカミを描いた木版画（写真2）が、1枚1銭3厘で出版されている¹²。



写真2 オオカミの版画

岩泉町における筆者の聞き取りでは、オオカミが山頂部に放牧中のウシを襲うので、放牧地の周りに牧柵を設け、夜は火を焚いて警戒にあたった。放牧地を共有していた隣村の隣接集落と共同で、集落総出で落とし穴を掘って狼の仔を罠に使い、しとめた話が伝えられている。落とし穴は、12尺の深さに掘ったという。さらに山伏に頼んで、近隣に狼が棲めないように呪ってもらうなど、牛馬を夏季に長期間にわたって山に放牧する北上山地の山村では、幕末から明治にかけての狼の脅威は重大なものであった。

遠野では、明治20年ごろに、突然山犬たちが気が狂って大変な噛み合いを始めたという伝承がある¹³。人にも馬にも見れば噛みつくので、田舎では戸外に出ることを控えたという。その後山犬はめっきりいなくなり、日清戦争後（明治28、1895年）は、馬を山に放しても心配することがなくなった。

¹¹ 野村純一編「浄法寺町昔話集」萩野書房（1982）

¹² 泉山恵一「儲け話」『狐森通信』第13号（2005、12）

¹³ 前掲4

また二戸市上斗米字上野では、蛇沼政恒が明治9(1876)年に羊15頭を購入し、翌年牧場を開いた。しかし羊を襲う7~15頭のニホンオオカミの群れに幾度も被害を受け、壊滅的な打撃を受けた¹⁴。明治43(1910)年に蛇沼牧場で撃ちとられたとされる狼の毛皮が二戸市内に現存している。この毛皮がニホンオオカミのものである確証はないが¹⁵、授乳中と思われる乳首が残るメスの個体で、散弾で撃たれているという。散弾銃が庶民の手に入ってくるのは、明治の末頃からだったといわれており¹⁶、捕獲時期の伝承とは一致している。

生物学的にはニホンオオカミの毛皮ではなくても、民俗学的には当時オオカミと考えていたケモノの毛皮であるならば、重要な価値を持つと考えられる。

このように明治以降もオオカミは岩手県に生息しており、明治の末期頃その姿を消していった。

3. 物産としてのシカ・イノシシとその増減

文久2(1862)年に盛岡に生まれた新渡戸稲造は、幼少期の記憶として、『私たちはいつも、鹿肉の煮込みが火鉢の上で湯気を立てているご馳走を歓迎した。家族はよく、居間で鹿鍋をかこみ夕食をした』と述べている¹⁷。盛岡の大正期を中心とする町方の暮らしの冬12、1、2月頃の賄いとして、キジ、ヤマドリ、ツグミと並んでシカ、イノシシ、ウマの肉が鍋物や味噌汁の具として食用に供されていた¹⁸。当時は、ウシやブタの肉はまだ一般的な食料ではなかった。

また盛岡と並んで岩手の城下町である遠野では、おもてむき獣を食べれば穢れると考えられていたものの、藩政時代から若者の酒盛りには山鯨と称してシカやイノシシの肉が持ち込まれたり、大病人には薬と称してその煮汁を飲ませることがあった。日露戦争から帰った凱旋兵をもてなすために、山狩りをしてイノシシを探したこともあった¹⁹。

このようにシカやイノシシの肉は、当時の盛岡や遠野における食肉としてウシやブタよりも一般的なものであったようである。

『岩手県管轄地誌』物産の項におけるシカの分布は図1の灰色で示した町村である。盛岡周辺や北上山地山村にも見られるが、特に県南の三陸海岸に近い地域、いわゆる気仙地方に、広くその分布が見られるのが特徴的である。その地域の中心にあるのが、五

14 名須川溢男編「明治大正昭和 岩手県の100年・歴史ものがたり」岩手出版(1984)

15 岩手日報「森を歩く 北東北の自然 48ニホンオオカミ 家畜襲い絶滅の道たどる」(2005. 12. 13)によれば鑑定の結果、肯定的な学者と否定的な学者がいた。なめされた毛皮だけのため、DNA鑑定が出来ないという。

16 千葉徳爾「狩猟伝承」法政大学出版局(1975)

17 新渡戸稲造『新渡戸稲造全集 第19巻』協文館(1985)

18 小林美代(1981)『南部盛岡 町方ぐらし』熊谷印刷出版部

19 前掲4

葉山である。

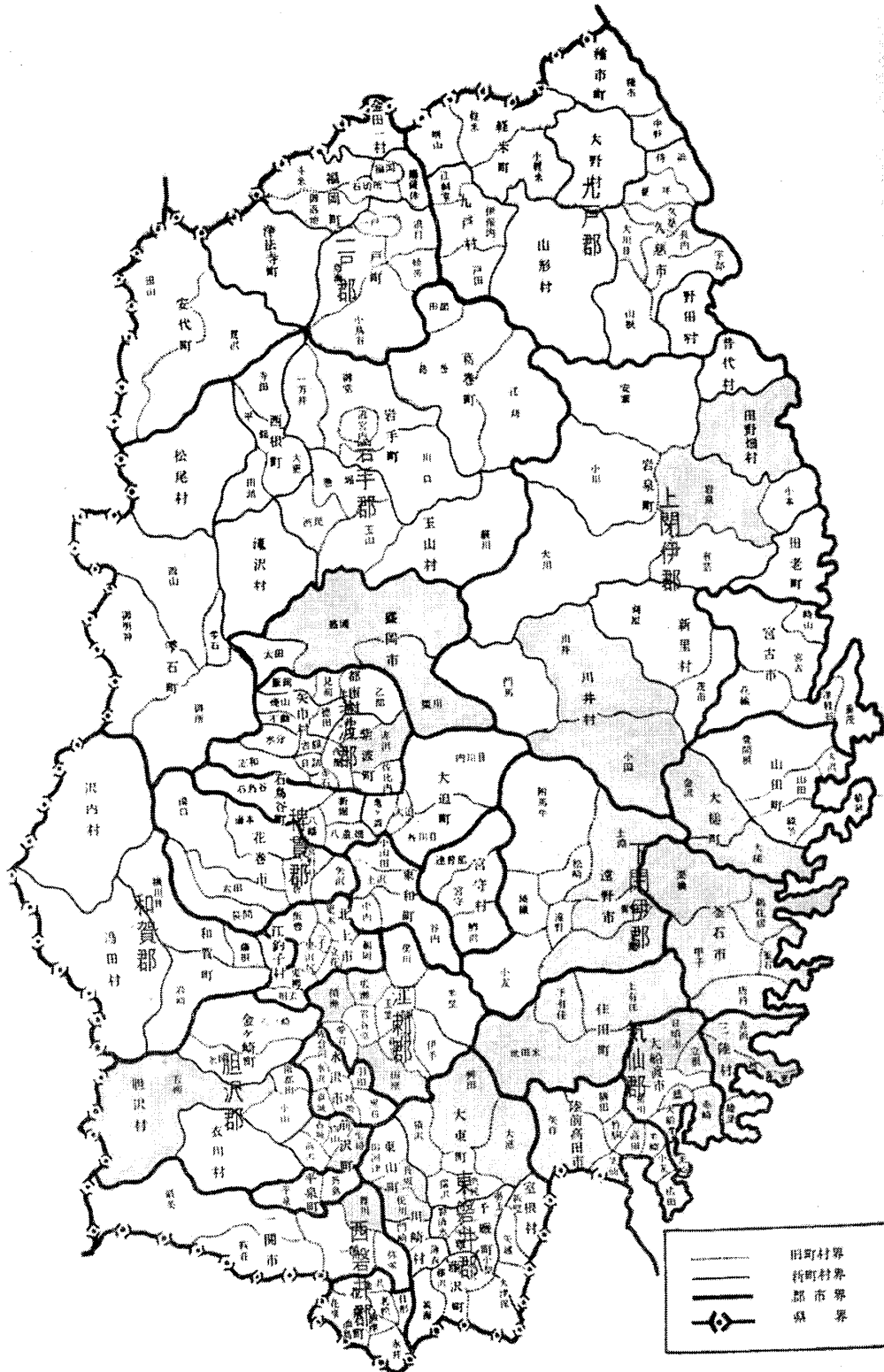


図1 明治前期・岩手県における物産としてのシカの分布

イノシシを物産に挙げた町村も、より県北に範囲を広げるものの、気仙地方を中心とする類似した分布を示している（図2）。

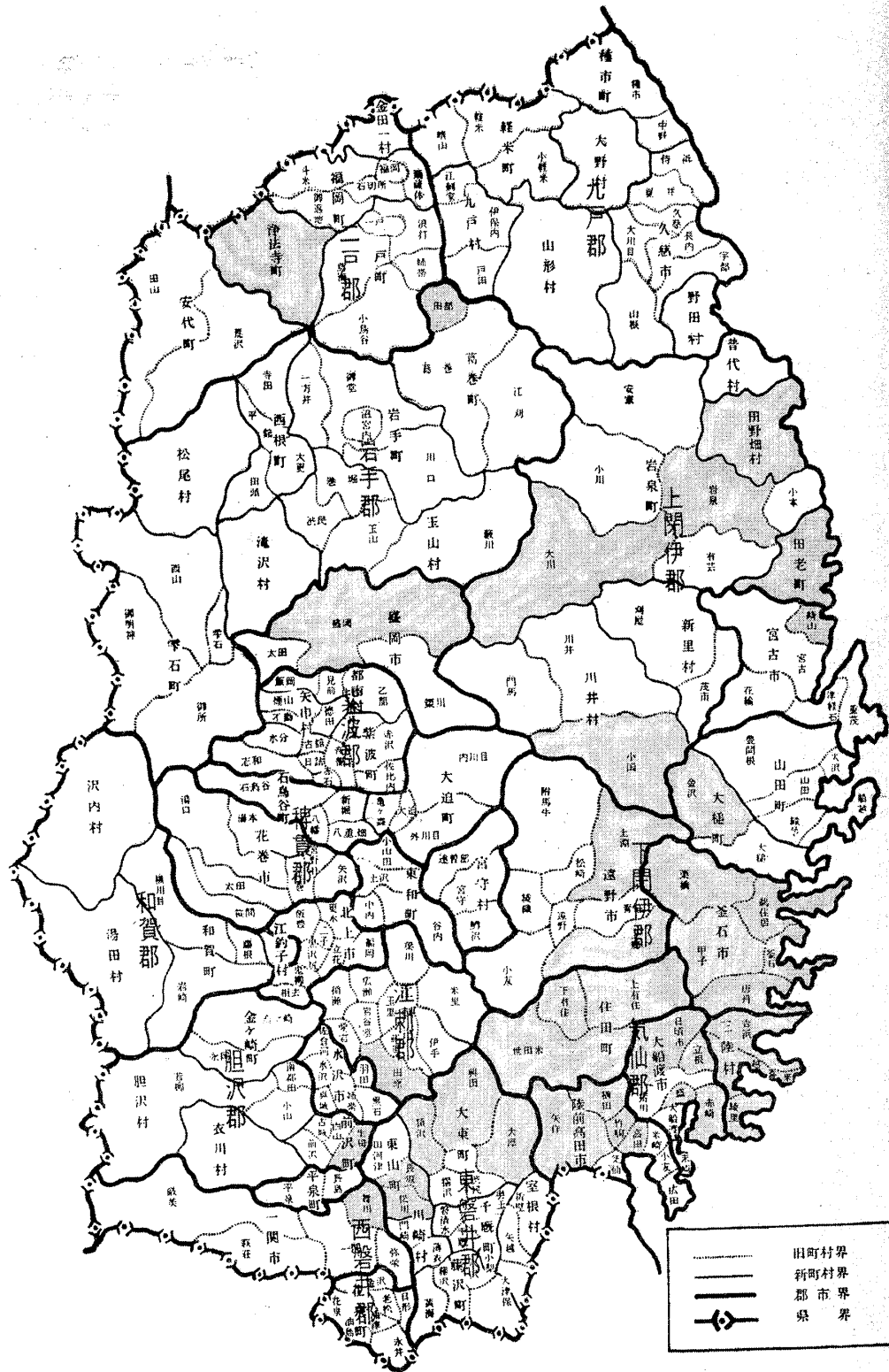


図2 明治前期・岩手県における物産としてのイノシシの分布

『五葉山』²⁰は、地元の新聞社によって五葉山周辺域の歴史・文化をまとめた優れた郷土誌であり、特にシカなどの大型哺乳類の生態と狩猟活動の歴史と実態が、研究者や記者の取材によって詳述されている。

この本によれば、五葉山山麓は、藩政時代には伊達藩直轄御留め山であった。この地域では、シカの干し肉、毛皮、角などが年貢代わりにされてきた。五葉山は、火縄銃には欠かせない火縄の原料となるヒノキアスナロの檜皮（ひわだ）の産地であり、伊達藩にとっては軍事的に重要であったと考えられる。寛永年間には、五葉山から毎年、1万4千尋の火縄を伊達藩に献納していたという記録が残っている。

また、イノシシやシカの農作物被害の対策のために、藩に火縄にする檜皮の払い下げを願う古文書も残っている。五葉山周辺の農山村では、藩政時代から藩直轄地という特殊な条件下にあり、森林の伐採は制限され、銃を用いてシカやイノシシを獲る猟が行われてきた地域であった²¹。また鹿笛も猟に用いられた。



写真3 左が鹿笛、中が雉笛、右はカモシカの皮の根付

五葉山では、明治期にはシカは多くいたが、明治19年から炭焼きによる伐採が始まり、オオカミがこの頃姿を消す。明治24～25年の大雪の年の冬、製炭者によって約200頭のシカが撲殺された。明治29年ごろからは周辺山村で村田銃が普及しはじめ、明治35年の大雪の年にも100頭以上が縄などによって捕獲され、以降シカはめっきり減少した。明治末期にはイノシシが姿を消している²²。

大正期にはシカの減少により、県による10年間の全県禁猟などの保護対策が講じられたが、解禁となった昭和初頭にも数日かけてやっと1頭を捕獲するような状況で、その数は非常に少なかった。このため県は昭和8年からさらに10年間の禁猟とした²³。

20 前掲5

21 前掲5

22 前掲5

23 前掲5

第二次世界大戦後、シカは徐々に増加に転じ、昭和46年以降は急増しはじめ、この頃から農作物への被害も聞かれるようになっていった。中北部北上山地では明治期に姿を消したシカが、絶滅の危機はあったもののそれを乗り越え、その後の個体数急増の母胎となったのが、この五葉山周辺域であった²⁴。

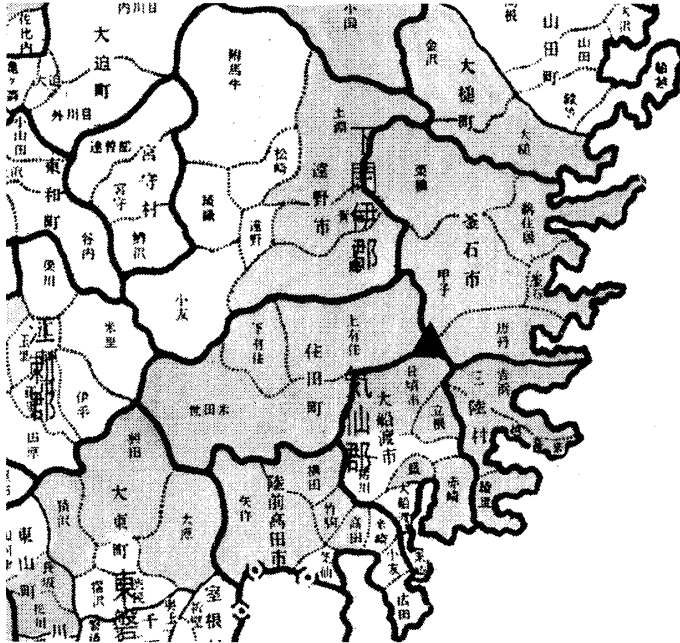


図3 五葉山周辺の市町村(灰色部分は鹿を物産とする町村)²⁵

4. シカ・イノシシ皮の利用

ところで『岩手県管轄地誌』では郡単位での物産についても記述がある。五葉山に隣接する気仙郡では、シカの皮の製品について、以下のように記されている。「鹿皮、越喜来村ヨリ出ルヲ最良トス。一ヶ年出高凡壺千枚陸中ニ輸出ス。鹿皮衣、日頃市村ニ出ルヲ良品トス。一ヶ年出高凡式百五拾枚三陸渡嶋国ニ輸出ス。」、つまり捕獲されたシカはこのように地元で製品化され、遠く北海道までも輸出されていたのである。

日頃市村にはシカ皮の専門職人「皮師」がいて、シカ皮をなめしたり、染色して縞や緋、紋付などまで染めて、羽織などに仕立てていた²⁶。この皮師はかなりの人数がいて、冬場になると、シカ皮の豊富な宮城県桃生郡方面に出稼ぎに出ていたという²⁷。また地元のシカ猟師たちも、大正から昭和初期にかけての10年間の禁猟期には、宮城県牡鹿半島まで出猟していたという²⁸。

²⁴ 前掲5

²⁵ 図の右の黒い三角形が五葉山の位置、灰色は物産にシカをあげている町村

²⁶ 前掲5

²⁷ 前掲5

²⁸ 前掲5

大正末期から昭和初期にもっとも使われた獣皮はシカの皮で、衣服、敷物、帽子、足袋、手甲、股引きに作られた。とくにシカ皮の半纏は2頭分の皮で1着作れ、『カゲン』または『カギン』と呼ばれ、男子の防寒用衣服として広く用いられた²⁹。

気仙地区にはシカ猟だけでなく、その皮を加工・製品化する技術文化が伝承されていた。そしてその資源が減少すると他地域まで出向いてその産業の維持を図り、製品



写真4 シカ皮の半纏、カギン(「五葉山」より引用)

は輸出されて少なからぬ経済価値を生んでいたことが推定できる。

イノシシでも「イノカータビ(猪の皮足袋)」が、気仙地方全域でかつて使われていた。猪が減少しその皮の入手が困難になると、シカやクマ、ブタ、犬の皮でも作られ、戦前まで使用されていた。雪道や漁、また森林の伐採時にもこのイノカータビが着用された。

イノシシの大きさはこのイノカータビが何足分取れるかで言いあらわされた。またイノシシの皮は細工も容易であり、チョッキや脛あてにも加工して用いられた³⁰。このようなシカやイノシシの皮の衣服、履物への利用は、気仙地区に限ったことではない。たとえば北上山地中部の川井村においても、シカ皮は小糠で脱脂して柔らかくし、胴着(皮胴着と称する)、手甲、脚絆、裁縫用指貫、靴などに作られたし、イノシシ皮も毛沓(ケグツ)に加工された³¹。

北上山地でのシカ、イノシシの利用の痕跡を追うのは、今後の課題であるが、川井村と同様の利用は筆者の調査地でもあった。かつてのシカ、イノシシが生息していた地域

²⁹ 「大船渡市史4巻民俗編」、「陸前高田市史5巻民俗編(上)」、「三陸町史5巻民俗一般編」

³⁰ 前掲29

³¹ 「川井村郷土史 下巻」川井村郷土史編纂委員会 川井村役場(1962)

では、これらの皮が、生活の基本となる「衣」の部分で、積極的に利用されていたのではないかと考えられる。

一般にシカやイノシシの皮は、他の大型哺乳類の皮と比べて柔らかく、加工しやすい。特にシカの皮は、藩政時代においても袴など狩衣としても用いられ、胴丸や武具類もシカの皮でなくてはならなかった。武具としてのシカの毛皮や皮は、柔軟で軽く、日本刀で切っても切れにくく、ショックを吸収し、毛の中が空洞のため衝撃を滑らせ、耐久性もあり、染色によって独特の色落ちをし、紐にしても柔軟で扱いやすい、といった利点を持つ³²。

このため藩政時代の大名狩りは、秋田佐竹藩においても、南部藩においても、シカが中心であり、最も多く獲られたのもシカであった。このように大型哺乳類の中でも特に、シカやイノシシの皮が多く利用されるのは、その皮の性質が加工や長期間の使用に耐えるし、馴染んでくるからなのである。

さらにシカおよびカモシカの角は、カツオやイカ釣りの擬餌針として、漁民の間に強い需要があった。ウシの角でも代用されたが、シカまたはカモシカの、しかも飴色をした角が最上とされていた³³（写真2）。

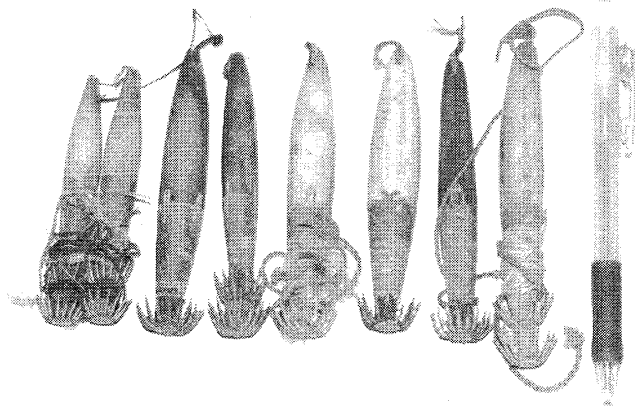


写真5 シカまたはカモシカの角を加工したイカ釣りの擬餌針

岩泉町では、シカの角で賭博に使うさいころを作ったという。

なお気仙郡赤沢村では、物産として猪胆があげられており³⁴、イノシシの胆嚢がおそらく薬用に製品化されていた可能性を示唆している³⁵。

五葉山周辺の山村、住田町上有住甲子地区の狩猟の全盛期は明治30年代であった。当時の獲物は、シカ、カモシカ、キツネ、ムジナ、テン、ウサギ、キジなどで、クマは

³² 日本では、印伝などのシカ皮の装飾技術や意匠も発達してきた。

³³ 北上山地の猟師だけでなく、秋田のマタギもカモシカの角を三陸の猟師に供給していた。

³⁴ 前掲7

³⁵ 千葉徳爾「オオカミはなぜ消えたか」新人物往来社（1995）では、イノシシの胆が熊胆の偽物として作られていたことを述べている。

あまり獲らなかつた。獵師宿では、個人獵、またはシシヤマ(シカ獵)に来た郡内外の獵師が泊まったり、飲食したりした。その際の宿での礼は、金銭ではなく、シカの肉、角、胆などでまかなわれることが多かつた³⁶。

三陸海岸中部の船越半島の村では、獲つたシカの肉は市日で売り、仲買人はそれをウマの背につけて盛岡に運んだ³⁷。気仙地方や船越地方などの三陸沿岸で取れたシカの大消費地は、やはり城下町盛岡だつたようである。

5. 岩手・秋田のサル獵

さて、ここで話は秋田県に移るが、大正初め頃までは、角館町のイサバ屋には、毛つきのままのサルやキツネ、ムジナ、カモシカ、ヤマドリ、ヤマウサギなどがぶら下げられ、枝肉として販売されていた³⁸。この地方は奥羽山脈沿いの地域であり、こうした野生動物の肉の流通には、いわゆるマタギが関わっていたと考えられる。

ここで注目されるのは、獸肉として岩手、盛岡ではもっともポピュラーだつたシカやイノシシの肉が含まれていない点である。秋田ではこれらの肉は食されなかつたのであろうか。

ここに興味深い指摘がある。大正初め頃まで仙岩峠(秋田・岩手県境)で、気仙沼や三陸地方あたりで盛んに獲れたシカの枝肉と秋田のサルの枝肉が物々交換されていた³⁹、というのである。三陸で獲れたシカの肉が、この時代秋田県まで流通していたことになる。そして岩手には秋田のサルの肉が入ってきていた。岩手県と秋田県において、それぞれ違つた種類の獸肉の需要があり、交易によってそれを満たしていたという事実は注目に値する。

それでは岩手県における物産としてのサルはどうだつたのだろうか。岩手県のサルの分布の減少については、すでに三戸による詳細な研究がある⁴⁰。そこでは、「サルを急激に消滅させ、分布を縮小させ、広大な分布空白域を作り出したのは、江戸後半から大正にかけての、とくに明治10年ほどから顕著になる強力な狩獵圧であつた」と結論づけられている。そしてサルの狩獵圧の増大の要因は、江戸後期の度々の凶作・飢饉による飢餓と、明治の性能の良い新たな獵銃の普及が指摘されている。後者については、筆者の調査地でも、村田銃の導入とともに山のけものが少なくなつたという話がよく聞かれる。

岩手県管轄地誌におけるサルを物産とする市町村を、図5に示した。

³⁶ 前掲5

³⁷ 前掲3、明治30年頃、シカの良い肉は一頭分十五円もした。

³⁸ 太田雄治「みちのくたべもの誌」現代美術(1974)

³⁹ 前掲38

⁴⁰ 三戸幸久(1992)「東北地方北部のニホンザルの分布はなぜ少ないのか」『生物科学』44(3)

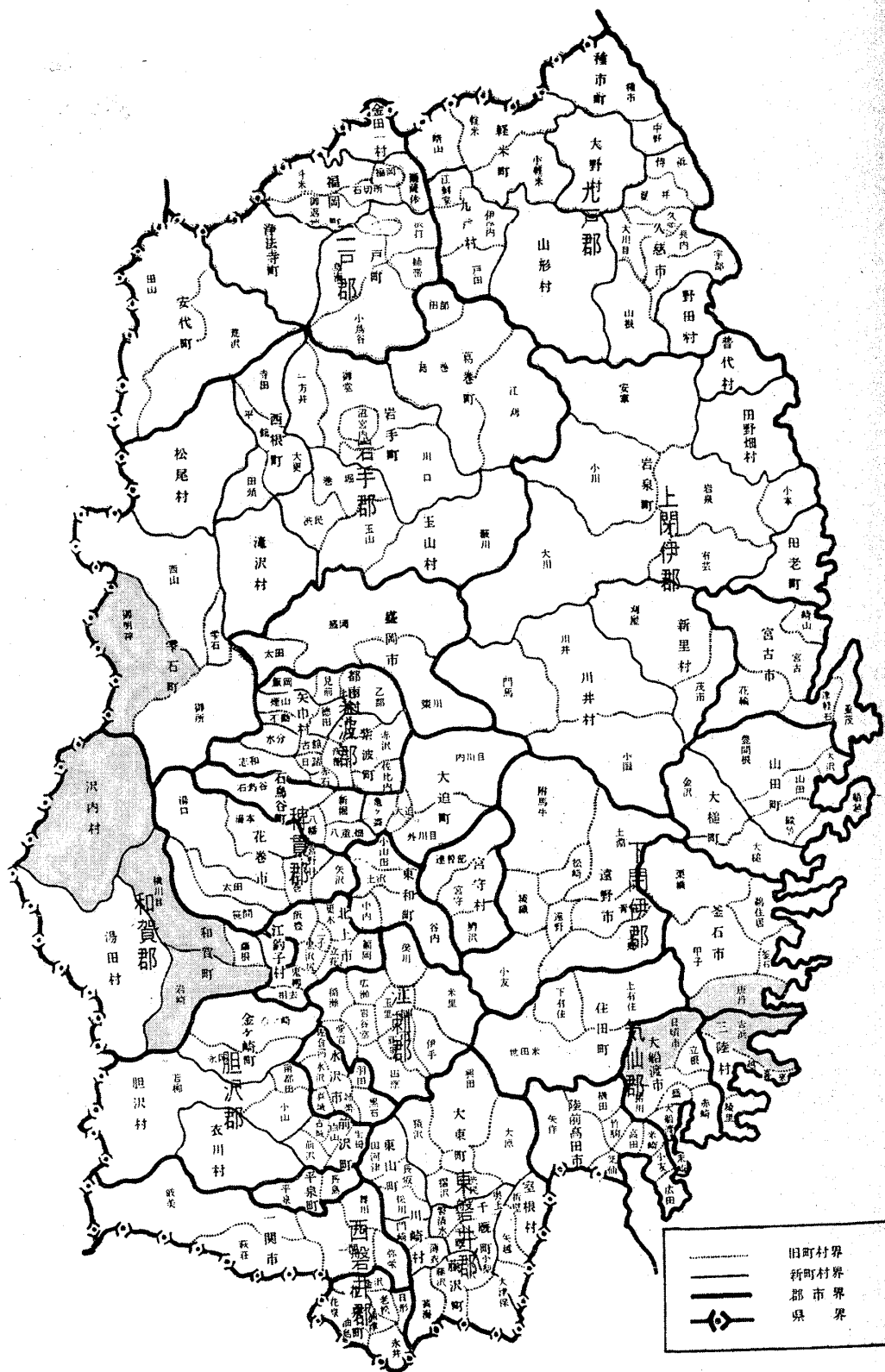


図4 明治前期・岩手県における物産としてのサルの分布

この図をどのように読むかは、今後取り組んでいく課題としておおくが、明治2（1869）年の「南部藩物産調」⁴¹における猿、および猿胆⁴²を物産とする地域より範囲がせまい。両者の物産についての解釈の違いや、調査の背景や意図、猟法とその効率の変化についても今後の検討を要すると考えられる。

なお、これまでの調査では、サルの場合は猿の話があまり聞かれず、いわゆる「サンコ焼き」と呼ばれる、頭を黒焼きにして薬として用いた話がよく聞かれる。「サンコ焼き」は、かなり広く日本各地で利用された民間薬であるが⁴³、北上山地山村では婦人の精神病の薬などとして知られている。ほかにも、サルの丸煮汁は労咳の薬に用いられ⁴⁴、サルの薬用価値が知られていた。

また北上山地の山村では、サルが人のそばに寄って来て、農作業や麻糸作りなどの所作を猿まねした、あるいは石を投げてきたという、牧歌的な伝承も聞かれる。自給的な性格が強かった明治・大正期の農耕においては、収穫物への獣害は即、自らの食料の不足につながっていた。しかしサルにまつわる伝承では、サルを害獣視するものはあまりない。

一方で、積極的にサルを対象とした狩猟を行っていたという記録は、奥羽山脈側に位置する、秋田県の阿仁や仙北地方のマタギの調査⁴⁵で見られる。阿仁から来たマタギがサルを獲りつくしたといった記録もみられる⁴⁶。秋田のマタギがいわゆる「旅マタギ」で北上山地まで遠征し、猿を行つたという記録も僅かだが存在する⁴⁷。

マタギが純粋な狩人と薬の行商に分化し、各地の狩人を訪れて熊の胆とともにサルの頭を買い集める者がいた⁴⁸。先に述べたサルの頭は薬用に加工されるとともに、厩猿信仰の対象としてその頭蓋骨が用いられたことが知られている⁴⁹。

秋田の仙北マタギでは、サルの頭は、厩につるして病気よけの呪いにするため、米5升で取引されており、バクロウたちは、サルの頭と手を馬の魔除けとして高く買っていた⁵⁰。また、明治・大正期に、かばんにサルの頭をつめこんで村々を行商する、秋田・山形方面の猟師がいた⁵¹。秋田のマタギが獲ったサルは、厩猿信仰のためにも売買され

41 岩手県「岩手農業史」（1979）掲載の大野・晴玉文書、晴山尚雅「南部風土記」。

42 廣瀬鎮「猿」法政大学出版局（1979）によれば、猿の胆は馬の良薬ともいわれ、岩手の馬産の伝統とかかわりがあるのかもしれない。

43 前掲42、石川県白山や四国地方のサルの黒焼きが特に知られており、高価だった。

44 前掲4

45 秋田魁新報社「秋田マタギと動物」秋田魁新報社（1967）、武藤鉄城「秋田マタギ聞書」慶友社（1969）、千葉徳爾「狩猟伝承研究」風間書房（1969）ほか多数。

46 千葉徳爾「狩猟伝承研究 総括編」風間書房（1986）

47 武藤鉄城「秋田マタギ聞書」慶友社（1969）、太田雄治「消えゆく山人の記録 マタギ」翠楊社（1979）

48 前掲46

49 千葉徳爾「狩猟伝承研究」風間書房（1969）など。

50 秋田魁新報社「秋田マタギと動物」秋田魁新報社（1967）

51 前掲35

ていたのである。こうした人々によって、サルは市場経済の商品に組み入れられていたのであろう。

なお、『岩手県北部地域のどこの家の厩にも、「おそうぜん様＝蒼膳様」といわれる厩ザルが祭ってあった』⁵²とする文献もある。しかし、少なくとも筆者の長年の調査地である岩泉町の周辺では、牛飼養農家はオソウゼンサマは信仰しているが、厩猿の信仰はまったく見られず、岩手県北部全域にこの信仰があったという主張は疑わしい。

遠野では、東北医科大学から解剖用の人体が不足するため、その代用としてサルが欲しいという注文が来たが、地元の狩人はあまりサルは獲らなかった⁵³。北東北の事例ではないが、白山山麓では、日清・日露戦争時には、軍馬の薬として多くのサルが捕獲された⁵⁴。

このようにサルは、人の薬として、あるいは呪術具として、また医学の発展のための献体として、戦争遂行に不可欠な軍馬の薬として、経済的価値を持っていたのである。

ほかにも鳥海山麓、山形県小国、奥会津地方や秋山郷など、サルの狩猟に積極的だった地域があり⁵⁵、さらにその利用法などについて調査をすすめていく。

さいごに今後明らかにすべき課題として触れておきたいのは、北東北の村々で実際に使われた猟銃の変遷である。明治中期に村に村田銃が入って、動物が減ったといわれる⁵⁶。しかしそれは火縄銃とはどのように違ったのか。両者の間に管打ち銃が用いられた時期があったともいわれ⁵⁷、また村田銃よりも洋式元込銃の普及を強調する文献もある⁵⁸。その導入時期や、性能の詳細と比較など、さらに調査をすすめていきたい。

⁵² 三戸幸久・渡邊邦夫「人とサルの社会史」東海大学出版会（1999）

⁵³ 前掲4

⁵⁴ 前掲4 2

⁵⁵ 安斎徹「熊・樹氷・自然」中央書院（1974）

⁵⁶ 前掲3 1

⁵⁷ 前掲5 および1 6

⁵⁸ 前掲4